１１　研究の概要

１　研究主題

自分の考えをもち、仲間と共に高まろうとする子どもの育成
～「主体的・対話的で深い学び」を視点とする授業改善を通して～
【みんなで わかる！ みんなに わかる！】

２　主題設定の理由

本校は、昨年度４校統合から１０年目の節目を迎えた。心温かい地域の方々から支援を受ける中、仲間と共に学び合う喜びに笑顔を輝かせ、一人一人が自分の考えをしっかりもちながら力を発揮していく姿を願って、日々の教育活動に取り組んでいる。また、一昨年度から全面実施となった新学習指導要領の下、急激な社会的変化の中で予測困難な時代を生きていく子どもたちが、未来の創り手となるために必要な資質・能力を確実に育むことを目指していく。

本校児童は“素直で真面目”“優しく親切”“協調性がある”等の長所があるものの、“消極的”“創意工夫の不足”という課題をなかなか克服できずにいる。その一因は、県学習状況調査からもうかがえる自尊感情の伸び悩みや自信のなさではないかと思われる。そこで、「互いによさを認め合い、思いを伝えながら高め合う関係を築く力」を、将来的に一人一人の社会的自立につながる能力や態度と捉え、昨年度まで、“「対話」と「協働」を軸に取り組むキャリア教育”を副主題として研究を重ねてきた。実際の取組では、『総合的な学習の時間』と『生活科』を中心教科とし、双方に共通する“課題に向かって『探究』する”過程の中で、子ども同士が自ら「対話」「協働」する力を高めてきた。地域貢献の意欲が大きい本校の児童は、大好きな自分たちの地域（ふるさと）を素材とする学習に「対話」「協働」しながら積極的に取り組む過程で、自分のよさに気付き自信がうまれ、“自分自身を大切に思う気持ち”の高まりにつながった。それが、他教科の授業でも積極的に自分の考えを発言できる児童が増えた要因になったと考える。しかし、教科によっては、まだ自分の考えをもてない児童も見られる。中には、自信がない、間違えたくない、順序立てて説明できない等の理由により、自分の考えをもっていても積極的に話せず、“授業が楽しくない”と感じている児童もいる。

本年度は、昨年度までの成果を生かしながら、日々の授業で、“児童全員が、自分の考えをもち、自信をもって自ら仲間と学び合い、学ぶ楽しさを実感できる”ことを目指したいと考える。そのためには、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした不断の授業改善が不可欠である。継続研究の１年目であるので、「主体的・対話的な学び」に重点を絞って授業改善を図る。それが、各教科等の「見方・考え方」を働かせる「深い学び」のある授業にもつながると考える。「主体的・対話的な学び」の力を高めるためには、伝えるための言葉の使い方や表し方等の表現力を養うことや伝えるためのスキルを身に付けることも大切である。教科の特質に応じた言語活動を大切にし、主体的な表現力の育成も意識していきたい。昨年度培った“課題に向かって『探究』する”過程で育まれた力を本年度は、『理科』と『生活科』を中心として一層高めていき、「深い学び」にもつなげていきたい。その力を他教科でも生かし、「仲間と共に高まろうとする子どもの育成」に迫っていきたい。

３　めざす子どもの姿

「自ら学び、お互いの考えを認め、学びを深める子ども」

４　研究の仮説

「主体的・対話的で深い学び」を視点として、日々の授業改善を重ね、“課題に向かって『探究』する姿”を大切にして学習をすすめていけば、児童が授業を楽しいと感じ、「自分の考えをもち、仲間と共に高まろうとする子ども」が育つであろう。

５　研究の視点と実践課題

（１）「主体的・対話的な学び」の視点に立った授業づくりにおける観点の共有化

①「主体的で対話的で深い学び」の理解
②「主体的で対話的な学び」におけるめざす児童の姿の理解
③「主体的で対話的な学び」につながる共通実践事項の設定
④発達段階（学団部）に応じた重点実践事項の設定

（２）「主体的・対話的な学び」の力を高める言語活動

①望ましい聴き手の育成と安心して話せる人間関係の形成
②語彙指導の充実と読書指導の拡充（学年毎の必読図書）
③基本話型の徹底と応用
④つなげる発表の意識化と双方向のやりとりの習慣化
⑤道徳科や学級活動での話合い活動の充実

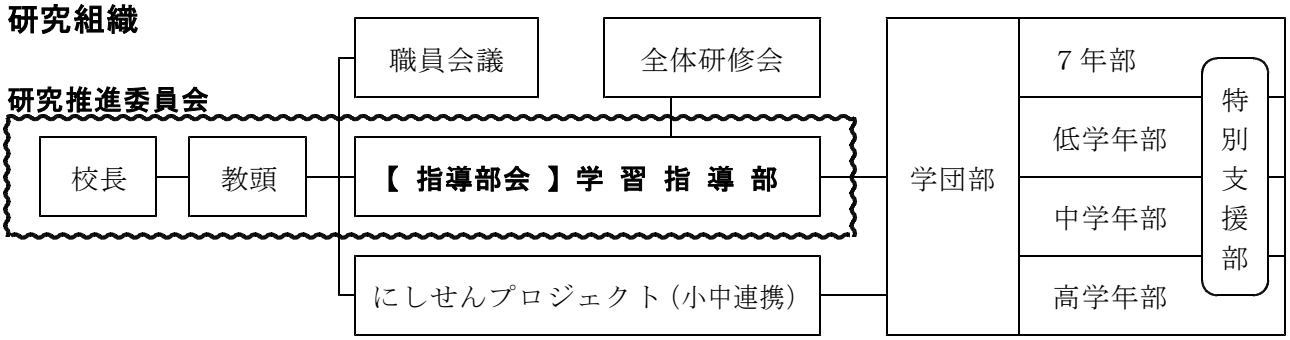
（３）各教科での“探究”の姿勢

①必要感のある主体的な課題設定と見通しをもった学習過程
②目的意識をもった体験活動や探究活動の保障
③課題解決のための情報活用力と多様な表現力
④視点を明確にした効果的な交流の場の工夫と学び合いの実感
⑤学びを生活につなげる振り返りの工夫

６　研究実践の基本方針

（１）基本的に水曜日を研修日とし、計画的に全体研修、授業研究会、個人研修を進めていく。
（２）論理的な思考力・表現力の素地となる基礎学力の習得や望ましい学習習慣・学習規律の定着にも力を入れる。
（３）『理科』『生活科』で探究する力を高め、それを他教科でも発揮することを意識していく。
（４）必要に応じて、正しい児童理解に基づいた望ましい人間関係形成のため、特別支援や生徒指導の研修を組み込んでいく。

７　研究の検証方法

（１）学習時間中や学習時間後、単元終了後等に行う各種評価
（２）授業研究会の協議や指導講評
（３）児童及び教師、保護者への各種アンケート
（４）県学習状況調査（４～６年)、標準学力検査（１～３年）等の客観的調査
（５）実践取組についてのＰＤＣＡサイクル表の作成と評価の積み重ね

８　研究組織